
魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。

をきた

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法は使いたいけど管理局には入りたくないありません。

【Zコード】

Z9467Z

【作者名】

をきた

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界観を借りた外伝物です。原作キャラは出ないので、それでもいいという人だけ見てください。それが嫌な人は見ずに帰つてください。

第一話「始まつ。イケメンなお兄さんが転生をしてくれた。」（前書き）

新連載。

第一話「始まり。イケメンなお兄さんが転生をしてくれた。」

「はじめまして。貴方が私のマスターですか？」

「いえ違います。」

「え？」

「え？」

これがインテリジェントデバイス「アイ」との出会いだった。
そこから魔法というものが存在する世界に巻き込まれる日々の始まりだった…

俺は前まで…というよりも前世は16歳だったが通り魔に刺されその後の短い人生を終えたはずだった。

ただ神様と名乗るイケメンなお兄さんが「すまん！…お前は通り魔に刺されて死ぬ運命じゃなかつたんだ。本当は別の人間が刺されて死ぬはずだったんだが俺の部下がその別の人間に好きになってしまい、そいつの運命を弄つてそいつを生かしてしまつた。だから運命を弄つたから別の人間が死ぬという運命が書きかわりお前が死ぬという運命に書きかわつたんだ。」ということがあり、転生することになった。

ただそこは人気の二次創作「魔法少女リリカルなのは」の世界であり別の転生者がいる可能性があり、それに殺されないために能力を貰えるということで俺は魔眼を貰つた。

貰つときに「魔眼があ。直死か？それとも複写眼か？殲滅眼か？」

直死？複写眼？殲滅眼？分からない…

俺はオリジナルの魔眼を作れるか聞いてみた。

「俺は神の中では一番上だからそんなもん簡単だ！！」

「つほど能力を伝えたら…

「お前…正氣か…転生して力が貰えるんだぜ…何でそんな能力を…！」

驚かれた挙げ句怒鳴られた。

俺が頼んだのは…相手の視界を乗つ取り田に見えるものを好きなよう誤認させる力。二つ目はまだ秘密で

「まあ、いいか。お前送つたら楽しそうだしな。」

そう言ってイケメンなお兄さんは俺の頭に手を置き力をくれた。

そして

そのまま頭を掴み俺を上に向かって投げた

は？普通足元に穴が開いてそこから落ちて転生なのに何で投げてんだあいつ…？

「！」は生と死の狭間なんだよ。下が死だ。上が生だ。下に落とすとせつかく転生させた魂が死ぬから上に投げたんだ。」「

それを聞いた瞬間目の前が白くなり意識が途絶えた。そして俺は転生した。

ただ俺が意識が途絶えそうな瞬間、イケメンなお兄さんが「汝の新たな生に幸あれ」と言った。

イケメンなお兄さんは悲しい顔をしながらそう言ったのが何故か見えて頭に焼き付いた。

そうして俺こと祭谷 雁斗といつ名を持つてこの世界に新たな生命として転生した。

のが約九年前だ。今は9歳の小学二年生です。

俺の両親は共働きであり家にいない。一人っ子だ。だから家には余り俺もない。

最近は近くを探索するのが趣味になつてきている。

小学校は私立聖祥大附属小学校だ。

主人公が通う小学校だつたな。

イケメンなお兄さんが夢で原作のアニメを延々とながし続けるから覚えたわ！－てかイケお兄さんなにやつてるんですか？

はあ。今日は神社の方に行つてくるわ。

このあとに出会いついでバイスに巻き込まれ原作とは違う別のロストロ

ギアが巻き起こした戦いに巻き込まれることをその時の俺は知るよ
しもなかつた。

続く！

第一話「テバイスとの出会いをして戦いへ。」というかテバイスとの出会いを描いて

投稿です。

第一話「トバイスとの出でこを描いて戦いく。」

神社

はあ～着いた～。やつぱり小学生の体だときついわ。神社の階段さて、早速辺りを探索しますか…

神社の近くの森

森の中は「」だらけだった…。

とつあえず、「」拾いをしながら探索をした。

「」はお坊さんと言つて貰ひました。

「――タ――スター」

ん? 何か聞こえる。どっからだ。

「マスター、マスター」

びつやうら俺の足元から聞こえるようだ。

足元にあるものと聞えれば、ただのチョーンだぞ。子供が鍵をなくさないようにベルトを着けるようなところにつけるな。

ん? 何でチョーン? しかもチョーンの先に宝石がついてるな

「貴方は私のマスターですか?」

「違います。」

「え？」

「え？」

なに言つてんだこいつ。こんなのに関わると大変なことになるから… さつさと退散。

「そこにの人…早くこの場から逃げてください…！」

変なことをまた言い始めたぞ。

「なにぼやつとしてるんですか…早くこの場から逃げてください…あ…？」

宝石がさつ言つた瞬間、俺の左腕が切り裂かれた。

「は？…ぐあああ…！」

一瞬何が何だか分からず体が認識しなかつたが…血を見て体が認識した。

・・・・・・・

左腕が切り裂かれ痛い

と

何だ！？何だいきなり。

痛い痛い痛い痛い

何かに切り裂かれた？

痛い痛い痛い痛い痛い

刃物？いや、鋭い爪？

痛い痛い痛い痛い痛い

痛みを我慢し冷静に分析をしようとすると…やはり人間は一度知つた痛みを忘れることが出来ない。

冷静に分析との間に左腕が切り裂かれた痛みを考えてしまつ。

ザシユ

誰かが森の雑草を踏む音だ。自分の前から聞こえたいいことは…

だんだん自分の左腕を切り裂いた人物が出てくる。

その人物の姿が見えていくたび切り裂かれた痛みとまた切り裂かれ
るかもしれない恐怖が雁斗を支配していく。

そして出てきたのはー

「グルルルーー！」

「狼？」

銀色の狼。ただ目が赤く染まりそして黒いオーラを纏っている。それだけでかい。

あれはー やばい！！

俺は死ぬのかな？

「そこの人！！私を持ってください。」

諦めかけたその時あのチーンの声が俺の耳に響いた。

「早く！！私をー」

仕方ない！！お前に賭けるから俺を絶体絶命の窮地から救ってくれー！！

俺は狼の隙をついてチーンの場所に走り、そいつを手に取った。

狼は、俺との距離を一瞬で詰めて俺の左腕を切り裂いた爪を俺に振りかぶった。

「プロテクションーー！」

その声がまた響いた。その声と共に鳴るかのように俺の前に水色の薄い壁が出来て、狼の爪を防いだ。

「マスター認証システム発動。貴方の名前は

「祭谷 雁斗」

「マスター認証。インテリジョントデバイス「アイ」のマスターを
祭谷 雁斗と承認。」

「マスター？インテリジョントデバイス？
さつきからなに言ってんだこのアイとか言ひナバイス？は。

「マスター！！バリアジャケットを

「はー？急にバリアジャケットで言われても分かるかー！」

「グルルル…」

狼さん…俺の準備が出来るのを待つてくれてるんですね。

「とにかく！！マスターの防護服のよつなものです。頭にそれらし
いものを思い浮かべてくださいーー！」

「分かつた。」

そういうことは早くいってくれないと…

防護服かあー何がいいかなつて狼さんが怒り始めてるへ
早くしないとーー！

よし大体こんなもんだろ？

「思い浮かべたなら私が直接脳から読み取りバリアジャケットを作
ります。」

怖つー！デバイス怖つー！

俺の周りに光が出てきて、その光が俺に集まってきた。

俺はジックリして目を閉じた… そろそろ良いかな?

目を開けると… 全身真っ黒。 真っ黒のジャケットに真っ黒のズボンに靴。 うん、 最高だなこれ!!

「キヤアアアアアアア」

アイには悲鳴をあげられた。 何故悲鳴をあげる。 かつこいいじやないか。

それにお前は俺の脳を読み取つてバリアジャケットを作つたのに何で悲鳴をあげる。 それに嫌ならバリアジャケットを作る前に言えれば良かつたじやん。

「何なんですか!? そのいかにも悪役です!! みたいなバリアジャケットは!?!?」

「そこはあとじよづ。 狼さんもつ限界りしこ…」

「グラアアア…」

狼さんは雄叫びをあげ、

・・・・・・・・・・・・・・

俺達がいる方向とは逆方向に走つた

「へ?」

アイは驚いてるな。 まあ、 今はることを聞かなくちゃな。

「アイ……武器はないのか！？」

「は？あ、あります……今から出します！……」

そして武器が出てきた。

淡い水色の刀身をした西洋刀だ。
黒と似合わねえ」

「よし、いくぞ……後サポート任せたアイ……」

「分かりました！！」

「グルルル……グラアアアア……」

いきなり狼さんが俺に飛びかかってきた。
狼さんは「乱心のようだな。だが

「プロテクション……」

ビキッ

狼の噛みつきを薄い障壁で防ぐが障壁にヒビが入った。

「アイ……拘束とか出来ないの！？」

剣を刺そうにもああ、速かつたら刺さる気がしない。

「一応、出来ます。使用しますか？」

「するに決まつてんだろう……」

「グラアアアー！」

狼がここぞといわんばかりに襲いかかってきた。

「今だ！……アイ！」

「マスター！魔力をお借りします！……チーンバインド……」

アイがそいつたら、俺の足元に丸い魔方陣みたいなのが出てきて、狼の下にも魔方陣が出てそこから一本の鎖が狼を拘束した。

「グカツ！？」

「…………ツ……」

グシュ……

俺は鎖で拘束された狼の顔に剣を刺した。

その時手には狼を刺した感触が伝わってきて気持ち悪くなつた。

「グ、グギャアアアアー！」

狼は断末魔のような雄叫びをあげ、消えた。

「…………ん？何か落ちてる。」

気持ち悪い気分をこまかそそうと狼がいた場所に落ちている物を見に行つた。

落ちていたのは？漆黒の銀狼という文字がはいつたちょっとでかい

金貨だつた。

狼は消えたというよりも金貨になつたが正しいかな。

とつねにやうやうすまう

ア
イ

「何ですか？マスター」

「治癒とか出来る?」

「は？」

魔法は使いたいけど管理局には入りたくないません。人物設定1（前書き）

雁斗といケメンなお兄さんです。

魔法は使いたいけど管理局には入りたくないません。人物設定1

名前	祭谷 雁斗
性別	男
年齢	9歳（転生前16）
愛称	雁斗 祭 かりちゃん
容姿	黒髪黒眼。髪は肩にかかる程度。目はつり目でもタレ目でもありません。フツ目です。体型は普通でか小学生がボディービルダーみたいな筋肉してるわけないじゃん。
性格	厄介事には巻き込まれたくないタイプ。ただ巻き込まれたら厄介事から逃げる事を諦め全力でやる事をやる。愛称のかりちゃんは母親から呼ばれる名前。
名前	？？？
性別	男？
年齢	？？？
愛称	イケメンなお兄さん イケお兄さん 神
容姿	銀髪を腰まで伸ばしている。目はつり目。目の色は翡翠
性格	さつぱりした性格。自分の部下がしたことだが転生させた雁斗を心配したり、原作知識のない雁斗に原作アニメを見せるなど心配性な一面も。運命を弄った部下は厳重注意と一ヶ月牢屋に閉じ込めただけ。死刑などにはしてない。甘いものが大好物。時折雁斗がいる世界に行き翠屋でケーキを買っていることがある。
最近は何故か釣りが趣味になつたらしい。前に暇潰しに行つた世界で青い髪をしたアロハを着た槍兵に釣りを教えてもらい、そのあと赤く口づるさい弓兵と仲良くなり釣り道具をもらい、色々な世界で釣りをしている。	

第三話「状況把握そして家族団らん。まあ、把握しても状況は全く変わらないよ

第三話「状況把握そして家族団ら。まあ、把握しても状況は全く変わりない」

「ふうへ 良かつた良かつた。血が止まつて…
まあ、まだ痛いんですけどね。」

「さて、アイ。早速聞きたいことがあるんだがいいか?」

「黙秘します…とは言えませんね。」

「頭良いな。インテリジョントデバイスつて。

「俺が使つたのは魔法…で良いんだよな?」

「ええ。マスターが使用したのは間違いなく魔法です。」

魔法についてはイケメンなお兄さんが毎晩毎晩原作アニメを見たされたから知つてゐる。デバイスやバリアジャケットその他については夢の中なのであまり覚えていません。あーー今うつすらと思い出せってきた。

「じゃこの金貨は…」

「…………」

黙りますか…まあ、動物が金貨になるなんてことはまずありえない。
だからこの正体は…

「これはロストロギアか?」

「……………やうでや。」

おお！ 答えた。

「何でロストロギアがここに？」

「これ以上はお答えできません…」

ふりん
まあ
いしが

アリはこれがどうですの、せりた

・ また決めてません

仕方なし テハイズは詰しかつたどニタ たし

「よし決めた！－アイ。とりあえず家に帰るぞ。続きはそこで話そ
う。」

「はい、分かりました。」

結構暗くなつてゐるな、急いで帰ろう！――

家

「ただいまー！」

ၯ

バタン！！

ダダダダダダダダ！！

「お帰り～かりちゃん！！」

未確認生物を前方に確認。

「アイ。」

念話でアイに話しかけた。

「何ですか？マスター」

「バリアジャケットと武器を出せ。そしてプロテクションをしたあとチヨーンバインドをしろ。」

何時までもそのデカ乳に埋もれて窒息死寸前まで追い詰められる生活から解放されるぜ！！ヒヤッハアー！！

「マスター！？何があつたのか知りませんが落ち着いてください！？」

チツー！仕方ない。回避！！

サツ（俺が横に移動する）

スカツ（未確認生物が空振り）

ゴツー！（未確認生物がドアと正面衝突）

そして、

「父ちゃん……未確認生物が気絶したよーーー！」

父さんに未確認生物の後片付けを頼むところ。

「死ねええええーー！雁斗おおおおおおーーー！」

「ボンーーと空氣を唸らせながら凄まじいパンチが飛んできた。

チツーー！俺を殺す氣か！仕方ない。必殺

「未確認生物の盾」

未確認生物もとい母親を盾にした。

空氣を唸らせながら迫つたパンチが止まつた。

「へーーー？明子を盾にするとほんとそれでも私達の息子かーーー？」

「ざけんなーーー壁を粉碎しそうなパンチを息子に向けるお前はそれでも俺の両親かーーー！」

「とりあえず、雁斗。明子を放しなさい。」

「分かった。」

俺は母さんを放した

ブオン！！

バキイ！！

放した瞬間、父さんのパンチによつて天井と床にキスをする」とことなつた。

「かかつたな！！馬鹿息子があ！！」

父さんの勝ち誇つた声を聞きながら氣絶した。

「む、一撃で氣絶とは我が息子ながら情けない。『ふつ！..』

ダツ！！

ドスツ！！

氣絶したふりをして父さんが油断してるとこに全力の腹タックルをかました。

「だがまだ甘いわ！！」

ドスツ！！

「グフツ！！ち、ちくしょ、う…」

父さんは腹から俺を掴み上げ、右拳を俺の腹めがけて降り下ろした。俺はそれをガード出来ずモロに食らい今度こそ氣絶した。

親子での殴り合いはの勝者は父親KO勝ちで殴り合いは終了した。

お前ら家族で何で殴り合いをしてるんだ? b ゆイケメンなお兄さん

知るか!…b ゆ父親に殴られた主人公

母親を未確認生物扱いしたからだ!! b ゆ大人げない父親

自室

あのあと、普通にご飯を食べ、風呂に入り、自室に戻ってきた。
まだ痛いよ…あいつは俺を殴るのに全く遠慮がないな…俺達本当に
親子?

「マスター。自業自得だと思います。」

ちくしょう…! デバイスまでもが俺の敵なのか…!

「マスター。私をどうするんですか?」

その問題を忘れていた…

「どうするもなにもお前を俺のデバイスにする。」

「…………本当ですか?」

「ああ、それに俺デバイス欲しかったんだよ。」

「もう知らないなんて言えないから、巻き込まれた以上全力で巻

き込まれた騒動を終わらす。」

めんぢくせこさぢ頑張りや。

とつあえず、今田はもつゝ處る。一。

ゆやすみ

第四話「魔導師の戦闘 また戦闘かよ。え？乱入者！？」（前書き）

もうムリポ…

第四話「魔導師の戦闘 また戦闘かよ。え?乱入者!-?」

早朝 公園

今日から魔法の練習をすることになった。

「マスター、あの人は誰ですか?」

「アイがそんなことを聞いてきた。

「イケメンなお兄さん」

俺達は結界がはれないのでイケメンなお兄さんを呼んではつてもらつた。

「俺だつて暇じゃないんだぞ。翠屋に行つてケーキ買った後釣りをしながらケーキを食うという大事なー」

充分暇だな。

「マスター。あの人、暇人ですか?」

「まあ、一日を釣りだけで終わらすぐらいだから暇だねつ。」

まあ、イケメンなお兄さんは置いといて…

「さて、マスター。気をとりなおして魔法の訓練を始めます。」

「デバイスが先生か…何か複雑だわ。」

「マスターにはまず射撃魔法を覚えてもらいます。私に出来るのは拘束、防御魔法しか出来ませんから。」

「射撃？」

「射撃魔法は「誘導制御型」「直射型」「物質加速型」があります。マスターには直射型を覚えてもらいます。」

「はあ……」

「このデバイスすぐえ……

「あとは……魔力斬撃と飛行ですかね。」

魔力斬撃？

「とりあえず、マスター。セカンドフォームになつてください。普通にセカンドと言えばなれます。」

「セカンドーー！」

パアアアアア

武器が剣から銃に変わつただけ。
黒い片手銃：いいね。

「さて、マスター。あそこには空き缶を置いてください。」

水飲み場に空き缶を置いてと…

「銃を空き缶に向けて構えてください。」

「銃を空き缶に向けると

「銃の前に魔力を集中させてください。」

「魔力を集中させると

銃の前に小さな弾が形成される。

「それを空き缶に当ててください。」

発射！！

ヒュン！！

ガゴン！！

見事に命中した。それにしても今のは速かつたな

「今のが直射型です。」

「これが魔法…」

「これは基本中の基本何ですが、一応技名をつけましょう。」

「技名か…ノーマルショットで良いよ。」

別にかっこいい技名じゃなくてもいい気がする。

「分かりました。では次は飛行をやってみましょう。」

「飛行か…どうやるんだ?」

「簡単に言えば、自分が飛ぶイメージをしてください。」

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ

ふわ。

「と、飛べたーーー！」

「マスターは飲み込みが早いですね。」

「ありがとうーーー！アイーーー！」

「ではマスター。この辺りを自由に飛んでください。」

「分かった。」

飛ぶイメージを鮮明に頭に浮かべ、再度飛行開始。

風を受けながら飛ぶ。いいね。魔法マジ便利ーーー！

適当に飛んだあと地面に降り立ち、インテリジョン・ト・デバイスアイ先生による魔法講座の続きが始まった。

てかこのデバイス何者ーーー？

「では次は魔力斬撃ですね。魔力斬撃とは命中対象を切断する特性を帯びた魔力による攻撃魔法です。」

「はあ…」

「簡単に言えば、剣に魔力を纏わせて切れ味を上げるみたいな感じです。」

「まあ、分かった。とりあえず、ファースト…！」

俺がそう言つと黒い片手銃から刀身が淡い水色の剣に変わった。

「よく分かりましたね。」

「いや、銃がセカンドだから剣がファーストかなつて思つてね。」

「そうですか。では剣に魔力を纏わせてください。」

剣に魔力を集中する。

「纏わせたらその魔力を鋭くしてください。」

鋭く鋭く鋭く

「出来たと思うならこの木を切つてください。」

「分かった。」

剣を木の横に当てそのまま水平に振つた。

ギュ
パ
！
！

ドオオーン！！

木が真っ二つに切れて上方のが地面に落ちた。

—すげえ

11

俺が驚きと喜びを交えた声を出した。
ただアイは何か考へてゐるよう見えた。

「マスターのタイプが分かりました。」

え！？

「タイブつて！？」

「ではそろそろ学校に行く時間ですよ。」

「無視ですか!? アイさん!!」

このあとどう聞いてもアイにはぐらかされ結局諦めて学校に行くことにした。

学校に到着！！まあ、バス何だけどさ。

平和なホームルームが終わつた。

一時間ぐらいに将来の夢について考えた。まあ、授業だから考えないといけないから考えた。あれ？これ原作のどっかでこいつの見たことあるんだけどキノセイダヨネ？

「昼ごはんの時間は一人で食べたけど…牛乳だけえ？友達はいないのか？」

「ははははは…！」いないけど何か？しかも食べるじゃなくて飲んだだけだらうだつて？俺が昼ごはんだと思えば昼ごはんだ…！」

下校へ帰りはバスじゃなくて徒歩ですけどね。

「マスター…！ロストロロギアの反応です…！」

急に言ひなよ…アイベニ。

「ビリよ？」

「……………」れは…？昨日私を見つけてくれた神社です…！」

はあーとりあえず行きますか…！」

神社

「これは…？森が酷いよひに荒らされてる。

「アイ。何か前とは違つんだけど。」

空が黒くなり月が出ている。

「誰かが結界をはっています。」

「けつー」

「…………！」

まるで俺達が来るのを待っていたかのように前方から雄叫びを上げて出てきた。

今回は、黒い人？巨人までとはいかないがデカイ。また、昨日の狼同様目が赤く黒いオーラを纏っている。そして手には赤く燃えるようなハンマーを握っていた。

「アイ。あれはロストロギアなのか？」

「紛れもなくロストロギアです。」

「とりあえず、アイ。セットアップ！－ファーストフォーム！－！」

黒いバリアジャケットを着て、剣を持つ。

「…………」

「…………」

その黒い人は、まるで雁人の準備が出来るのを待っているかのように静かだった。

そして

「ツー！」

「――――――！」

昨日ほどの狼狽速さはないがそのかわり凄まじい鬪氣をこちらに向け走ってきた。

「プロテクションーー！」

アイはプロテクションを張るが

「――――――！」

「ブオンーー！」

「バキイイインーー！」

黒い人のハンマーでむなしく破壊された。

「なつーー？」

「――――！」

「ブオンーー！」

「ズトオンーー！」

プロテクションを破られたことに驚いていた雁人は、黒い人のハンマーを避けることが出来ずに食らった。

ハンマーを食らい、数メートル飛ばされた。

「「ほつ！」「ほつ！オエツ！」

「マスター！来ます。」

黒い人は上に飛び上がり、ハンマーを振りかぶり、落ちる勢いを利
用してハンマーを降り下ろした。

ドオオオオン！！

地面がくだけ散った。

雁人は、転がつて回避した。

「セカンド！！」

雁人はすぐさま接近戦をやめ、銃に切り替え空を飛んだ。

「ノーマルショット！！」

空から魔力弾を作り放つたが…

「-----！」

ブオン！！

ただの一振りであっけなく打ち落とされた。

「あれは…チート使ってんじゃねえのか？」

— ! ! ! —

ブオン！！

黒い人はハンマーを雁人に向かって

拾
七
九

「マスター！！回避をしてください！！」

飛んでくるハンマーを回避した

かに思われたがハンマーがブーメランのように戻ってきた。

「マスター！後ろ！？」

「甚麼？」

ドオーン！！

見事に背中に命中した。

バシツ！！

ハンマーは黒い人の手に戻った。

「アイ… 一つ賭けに出ねえか?」

「賭けですか?」

マスター。下手したら負けますよ。

アイン 言ふたるう。賭けに出ねえがつて

分かりました。行きますよ。

アキ チヨンハイントを頼む

はし チニシハイント!!

「アイがそへ言」と相手の下から一本の鎌が出て黒い人を拘束した。

.....

バキイイイン

があつさり破壊した。

「男は当たつて砕けるだ！！ファースト！！」

雁人の武器が銃から剣に変わった。

そのまま黒い人に突撃した。

ただそれを許すほど黒い人は甘くない。雁人を落とすためハンマーを振つた。

ドスン！！

ガシッ！！

ハンマーは雁人に命中したが吹き飛ばされずに黒い人の手を掴んだ。

「行くぜ！！魔力剣」

雁人の剣が魔力を纏い、魔力が剣の形に形成された。

ザシユ！！

その魔力剣が黒い人の首を貫いた。

「-----！」

ドスン！！

「ぐはつ！？」

黒い人は首に剣を刺されてもまだ動き、雁人に再度ハンマーを当て地面に叩きつけた。

「ファイアレーザー……」

その時、ある少女声が響いた。

赤い砲撃は雁人と黒い人に飛んでいき、爆発した。

「漆黒の狂人撃破完了。」

その少女はそう呟いた。

第五話「乱入者そしてダイナミック人投げ

ていうか黒い人に負けたようなもく

まだ頑張れる。

第五話「乱入者そしてダイナミック人投げ ていうか黒い人に負けたようなもく

雁人視点

「ごほっ！…何だ！？いきなり誰かが何か撃つてきたぞ。

「マスター！…大丈夫ですか！？」

「アイ…

「俺は無事だ。どこで何があつた？」

「何者かが私達に砲撃魔法を撃つてきました。」

砲撃魔法つて原作の主人公の高町なのはが得意とした魔法だよな。

「漆黒の狂人と一緒に消えたと思ったのですがまだ生きていたんですねか…」

と上から声が聞こえた。

声の主は、茶色の髪をポニーテールにして目の色は青。そして姿は可愛い魔法少女みたいな服装…ただ色が赤と黒を中心としたバリアジャケットだ。まるで悪魔をモチーフにしたようだ。

「お前が砲撃を撃つた犯人か？」

「はい、その通りです。」

あつさり認めたぞ。

「お前… その角度にいたらパンツが見えるぞ。」

「マスター…？」

「…ッ…！」

赤くなれても困るんだけど…

「ファイアショート…！」

少女が顔を赤く染めながら魔力弾を生成し俺に放った。
合計16発の魔力弾が俺に迫ってくるーて、え！？

「セカンド…！マルチショット…！」

俺はすかさずセカンドフォームになり、魔力弾生成し4発放つたが
相手の魔力弾を全て落とすには数が足りない。

数にして12発の魔力弾が俺に迫るー

ブオン…！

が突如飛来したハンマーに全て落とされた。

は？嘘だろ…

「そんな…馬鹿な事が…」

「まさか…」

俺達は驚愕した。

パシッ！！

煙の中からハンマーを取り、黒い人が悠然と出てきた。まるで砲撃なんて効いてないぞと言わんばかりに雄叫びを上げた。

「-----！」

黒い人は生きていた。

「おいおい、首に致命傷もらつてそのうえ砲撃をもらつてもまだ倒れないのかよ！？」

「どんだけチート何だよ！？」

「ファイアレーザー！！」

油断した…俺が黒い人を見てると少女は俺に向かって砲撃を撃つてきた。

ドオオオオン！！

砲撃をモロに食らった。熱くて痛い。

バリアジャケットを貫通しかけたんだけど。

「マスター！？しつかりしてくださいーーー！」

アイ心配しなくともちゃんと聞こえてるよ。けど無理だわ。黒い人

のハンマーを4発と砲撃を食らったから流石にもう限界だわ。

「これで漆黒の狂人に集中出来ますね。」

少女が呟いたその瞬間、俺は目を疑つた。

「-----！」

黒い人がこちらに向かつてきてるんですけど。

は？

黒い人は俺を守るように背を向け立つていた…

「ファイアショート！！」

少女が魔力弾を生成し黒い人に放つた。

ブオン！！

「-----！」

黒い人はそれをハンマーを投擲し難なく打ち落とす。

「ファイアパニッショ！…」

少女が魔力を自分の前方に溜めてそれを砲撃として放つ。ただ途中で砲撃が広範囲に拡散した。

砲撃が雨のようになり、俺達に向かつてくる。

.....

対する黒い人はハンマーを地面に置き、腕を顔の前で交差させ、防
御体制をとった。

砲撃の雨が降り注いだ。

砲撃の雨が降り注いだ。

砲撃の雨で煙が立ち、当たりの視界を奪つた。

「……ツ！－これでも倒れないんですか？」

やがて煙がはれ、地面は所々へこんだりえぐれたりしていた。

ただ黒い人は何事もないように立っていた。

「やうやく... 風氣ある少年よ」

誰の声ですか？

「まさか…ロストロギアが喋つた！？」

少女が驚いてるな。

「マスター！ロストロギアが喋るなんてあり得ない」となんです

アイ：分かつたありがとう。

「で何ですか？黒い人」

「私は君に負けた。」

いや、どう見てもこいつちが負けじゃん。

「いや、君は明らかに戦いをはじめたばかりだと戦つていて分かつた。そんな君に致命傷を貰つたんだ。君が勝つたも同然だ。」

いや、致命傷を貰つたんだつてあんたピンピンしてるじゃん。

「私は一人の戦士として君に負けた。だから戦士として勝つたものしたにつく。」

「え！？味方になつてくれること？」

「ああ、と言いたいところだが君から貰つた致命傷のせいでもうすぐ消える…だから君をここから逃がすことだけやらしてもいいわ。」

ガシッ！

へ？黒い人。何で頭を掴むんですか？

ブン！

て、うおおおおおお！？投げ飛ばしあがつたあの野郎！？

覚えていろよ！…黒い奴！？

雁人視点終了

黒い人視点

さて、少年は空を飛べるから大丈夫だろ？。

問題は…

「あなたが喋れたことには驚きましたが邪魔者を逃がしてくれたこと感謝します。これであなたを消すことだけに集中出来ます！！」

この少女か…

「君に私を消すことなんて出来ない。」

「やつてみないと分かりません。」

この少女が何故私のような亡靈のようなロストロギアを求めるかは分からぬ。

「ツーーーあなた…体が…」

どうやら限界らしいな。理性をなくし、じす黒い狂気に身を任せた私が…まさかあのよつな少年に負けるとはな。

「私の金貨は少年を投げるときに少年に持たせた。だから今私を消そうがロストロギアは手に入らないがそれでも私を消すか？」

「いえ、私の目的は、ロストロギアです。ロストロギアを持つないあなたを消すことに意味はありません。ですからここは引かしていただきます。」

少女はそう言ひて空へ消えていった。

さて、私の役目はここまでか…少年からはあの獣の気配がした。少女からは彼女の気配。

私を含めれば三人…あと一人だけか。

少年。あの二人は私のように優しくはないぞ。

さて、亡靈は早く消えるとしよう。

ではさらばだ。勇気ある少年よ。そして少女よ。

私は笑いながら消えた。

第六話「着地失敗！！そして腕輪？ 黒い人、いきなり投げるな！！そして主…

今日は短いです。あ！！いつもか…

第六話「着地失敗！－そして腕輪？ 黒い人、いきなり投げるな－！－そして主－

黒い人に投げられたあと、俺は河原に叩きつけられた。

「背中が痛い…」

「マスター。大丈夫ですか？」

「受け身をとるのを忘れてた。」

「…背中が本当に痛い…！」

「あれ？ポツケに何か入ってる…これは…？」

「ロストロギア…」

？漆黒の狂人という文字がはいった金貨が俺のポツケに入っていた。

「マスター？」

「おっとちよつとボーとしてたな。

力チャ－！」

金貨をポツケに入れようとしたら何かの音がした。

「今の何の音でしょうか？」

音の発生源をたどると…

俺の右腕に黒い腕輪がついていた。

「何これ？」

「腕輪ですかね。」

言わなくても分かるよアイ。

「少年よ。聞こえるか。」

すると金貨から聞き覚えのある声が聞こえた。

「黒い人！！よくも投げ飛ばしやがったな！！」

さつき俺を投げた……黒い人の声だった。

少年よ、
私からの贈り物を受け取ったか。

「元々腕に一してしたから受け取った訳じゃなしそう！」

なんたけのギターギターリー

「さて、私の意識が消える前に金貨と腕輪の使い方を教えていいこうと思つ。」

ん？使い方？

「まず、私が狼の金貨を出してくれ。」

お前にじょい。

「腕輪に金貨をはめるとこうがある。やじこはめてくれ。」

ん？ああ、じこか…

力チ！！

金貨をはめた瞬間、俺は黒い霧に包まれた。

霧がはれると…

手に黒い人と同じハンマーがあつた…

え！？ええええええええええ！？

「その腕輪ははめた金貨によって装備を変えてくれて、ある特殊能力がつぶ。」

特殊能力？

「一つは相手の防御魔法を破壊できる。」

すげえ便利だな。

「ただし代償としてじこははじこは防御魔法を使用することが出来ない。」

「使えねえー。」

「……………」田は、ハンマーを伸縮自在に伸ばせて大きさを変

えれる。そのかわり……」

またかよー?」

「飛行魔法が使えない。」

「寝言なら寝て言えよ……」

飛行が使えないのはキツい。

「だから使つのはトドメか短期決戦ぐらいだろ?」
「ん?」

「お前は砲撃を喰らつても平然と立つていたよな。」

「鎧は本物だ。」

分かりました。とりあえず攻撃力が必要になつたら使お。

「すいません。警察ですか?」

ん?何かあつたのか?

「IJJに鈍器を持った少年がいます。直ぐに来てください。」

通報されちゃった！？

ヤバイ、この場から一時撤退！！

ハンマー重たくてしかも邪魔にしかならねえ！？

第七話「邂逅 新しい力を手に入れただけで使こじらが難しい」（前書き）

特になし

第七話「邂逅 新しい力を手に入れただけど使いこなすが難しい」

警察に通報されてあの場から逃げた。

あの後ハンマーをしまった。あれ凄く重いよ。ハンマーを片付けたら走る速度が結構速くなつた・・・・・どんだけ重いんだよあのハンマー

「マスター。また結界がはられました。」

何だと? そう言えば、景色が変わつてゐるな。

「マスター!! 前方に魔力反応です!!」

「アイの声を聞いて、斜め上を向いたら... いたよ。あのときの少女が。

「見つけました。あのとき漆黒の狂人に投げられた少年。」

嫌なことを思い出させてくれるな。

「あなたを探してのには理由があります。」

「理由? 僕に話しかけたのも来たの?」

「はい、その通りです。」

あ、当たつた!?

「単刀直入に言います。貴方の所持しているロストロギアを渡してください。渡さないなら力ずくで奪います。」

話し合いじゃなかつた！？

「ちよつと待つて！？お願いだから待つてよおおーー。」

少女が金貨を出した。

「？漆黒の魔女。召喚。」

少女がそういつた瞬間、少女の前に黒いオーラが集まり、そこから黒いとんがつた帽子を被つた女の人 who 出てきた。

「ん～久々に出したと思つたらあんな少年が相手なの？」

「はい。」

喋つた！？黒い人と同じか。

あの少女…ロストロギアから魔女を出した…とにかく同じロストロギアを持つてる俺も出来る可能性があるーー

俺は直ぐに狼の金貨を出した。

「？漆黒の銀狼召喚ーーー。」

すると金貨からあのとき俺が倒した狼が出てきた。

「へえーただの少年かと思つたらあの狼を倒せる程実力はあるようね。」

「まさかまだロストロゴギアを持っていたとは……」

「小僧……」の俺を呼び出して何のようだ。」

狼さん、案外友好できだつた。俺はてつ生きり「人間風情があ……あの時はよくも俺を殺してくれたな……その頭を食いちぎつてやるよ……」的な感じだと思つてたのに

「小僧……感謝する。」

へ？

「まさか……あのくそ女と戦える機会をくれるとか……」

「それはこいつらの台詞よ。駄犬」

「五月蠅いぞ……性悪女が……」

まさか……お前ら、仲悪いの？

「ええい、小僧……俺は俺で戦わしてもらひつ……」

「え……？」

「まず、あの駄犬を消すわ……」

「ちよつと……？」

ロストロゴギア達は光の速さで消えた……そして俺たちの間に訪れたの

は…重たい沈黙だった。

「…………」

「…………」

この場に居たくない…早くこの場を去りたい。

「あの、ちよつといいですか？」

重たい沈黙の中少女が話しかけてきた。

「な、何かな？」

「一時休戦にしませんか？私達のロストロギアが帰つて来るまで…」

確かに…元々ロストロギアを奪つたために来てるのとそのロストロギアがいなくなつたら戦つ意味もないか。

「分かった。一時休戦を受け入れるよ。」

「ありがとうございます。」

さて、ロストロギアはどこまで行つたんだろうか？ていうかあいつらあんなに仲悪かったのかよ…

まあ、あいつが帰つてきたら聞いてみるか

一万PV突破記念「反省会から暴走会 反省会なんて形だけ、暴走させるのが作

え？意味が分からぬ…俺も途中から分からくなつた。

一万PV突破記念「反省会から暴走会 反省会なんて形だけ、暴走させるのが作

一万PV

ア「突破記念」

雁「反省会！！」

一万PV突破した記念なのに反省会なの？

雁「大丈夫だ作者。反省会なんて形だけだ。」

ア「まあ、反省する点が多いから出来ないのが本音なんですか。」

ぐはっ！？

雁「ヒヒヒで作者。これって恋愛つてあるの？」

唐突だな。

ア「年頃の男の子には気になるんでしょ？」

雁「き、気になつてなんかナイテスコト！」

ア・作「『図星か。』」

雁「ずずずず図星じゃないし！？」

ア「嘘が下手ですね。マスター。」

雁「アイはどっちの味方なんだよーーー。」

ア「私は私の味方です。」

上から目線かよ。

ア「いえ、そうじゃありません。心を持つ生物は誰の味方になるかなど最後に決めるのは自分です。どんな時、どんな状況でも最後に決断するのは自分です。だから私は私の味方です。」

デバイスが心について語るなよ。

雁「これって本当にデバイス？」

まあ、それはさておき。恋愛は多分ありません。

雁「何で！？」

知ってるか？恋愛フラグと死亡フラグはセット。恋愛フラグが立てば立つほど死亡フラグも立つんだぜ。だからフラグメイカーは恋愛フラグがたくさん立てば、死亡フラグもたくさん立つんだ。

雁「何か怖いな。フラグメイカー。」

ア「本当は作者が恋愛を書くほどの文才がないからやらないだけで
しょう。」

ぐぱつ！？

ア「そもそも戦闘描写 자체まともに書けない人が恋愛なんて書けないに決まっているでしょう。」

ぶるああああああああ！？

雁「アイさん！？作者のライフはもうゼロを通り越してマイナスよ！？もうやめて！？」

ア「まあ、今はこの辺で許しましょう。」

あ、ありがとガバババババババババ

雁「作者が壊れた！？」

ア「やり過ぎましたね…」

雁「作者…？目をさませ…？」

私の世間は敵だらけ

雁「意味が分からん！？」

何で水着でプールを泳いでも良いのにパンツは駄目なんだ…

雁「知るか！？」

ア「世間が許しません。」

何で…何で…

雁「ヤバイ！ ！本格的に壊れてきた…」

何で…地球は回るの？

雁「知らん…！ てか小学生にそんなん聞くなよ…。」

ア「一つ言つてあげましょ。」

何…何何何何何何何何何何何何…！

ア「…都合主義です。」

雁「いや、それ言つちや駄目なんじや？」

「都合主義」都合主義「都合主義」都合主義「都合主義」都合主義「都合主義」都合主義
「都合主義」都合主義

ア「…都合主義です。」

雁「俺じやあも「シッ」「//あれねえ…だから終わる。じやあまた本
編で…！」

第八話「沈黙そして戦闘 あの沈黙の時間は本当にヤバかった。」

一時休戦を受け入れ、あの沈黙から逃げた…

「…………」

「…………」

「…………」

逃げたと思ったのにまた沈黙がやって来た。人生そこまで甘くないよね。

悲しいけど現実なのよね。

「いくつか質問してもよろしいですか？」

少女が声をかけてきた。

「別にいいよ。」

「では、貴方は何故ロストロギアを集めているんですか？」

「巻き込まれたから。」

俺が質問に答えたなら、少女は頭に?マークを浮かべた。

「どういふ意味ですか?」

「どうやら考へても答へはでなかつたようだ。」

「どうと言われても…説明が難しいな…」

「質問を変えます。貴方はどうやって魔法を知ったんですか？」

「アイに教えてもらつた。」

俺がアイの名前を出したら少女の表情が変わった。

「アイと書つのはインテリジェントデバイス「アイ」でいいんですか。」

「ああ、そつだが……あれ？」

何でアイがインテリジェントデバイスって分かつたんだ？

「そうですか……」

少女は考えこんでしまった。

それにしてもあいつどこに行つたんだ。

「では、最後です。私の名前は、レナと言います。貴方の名前は、なんと言つんですか？」

「祭谷 雁人だ。」

「祭谷 雁人ですね。記憶しました。では、今から貴方を倒します。」

そう言って少女はバリアジャケットを纏い空へ上がった。

そして武器である杖をじりじりと向けた。

え！？

「な、何で！？」

一時休戦をもうやめた！？

「貴方は貴方の持っているデバイスを理解していませんね。」

デバイス？

「やめてください……それを言つのは……！」

アイ……久しぶりに声を聞いたような気がする。

「インテリジョントデバイス「隙あり……」ツ……」

俺はバリアジャケットを纏い剣を空にいる少女に向かつて投げた。

「ファイア……」

少女の回りに赤い魔力の玉が生成された。数は10

「セカンドあ……そりゃ劍投げたんだっけ？」

セカンドになり撃ち落とそうとしたが剣を投げていたためなれなかつた。

「魔力を借ります。マスター。」

頼りになるデバイス。その名もアイ！！

「シューート！！」

魔力の玉が俺に迫るがー

「ラウンドシールド」

俺の前に丸い魔方陣が出てきて魔力の玉を防いだ。

さてー

「ダッシュううううううううーー！」

俺は走った…剣をとるために

「行きますーー！」

少女が俺の前に立ち杖を水平に振った。

ブンーー！

「あ、危なあーー！」

俺はそれをしゃがんで避けた。

「セカンドーー！」

剣を取りすぐさま銃に切り替えた。

「ファイアレーザーーー！」

少女は一ひらに向かって杖をかまえて砲撃魔法を撃つてきた。

「撃ち落とす。」

腕輪に黒い人の金貨をはめハンマー出し

ブオンーー！

ドオーンーー！

撃ち落とせたけど爆風で俺は飛ばされた。

「ファイアバスターーーー！」

少女はさつきと同じ砲撃を撃つてきた。

また撃ち落とす。

ブオンーー！

すかつ

「えーー？」

砲撃が曲がった！？

ドオーンーー！

砲撃は曲がり俺の後ろに回り込み無防備な背中に当たり爆発した。

「マスター！？大丈夫ですか！？」

「アイさん…最近それしか言ってないような？
あれ？最近？アイと会ったのって確かー

「マスター。メタな思考もそこまでです。」

「すいません。」

アイさんから赤いオーラが出ていた。怖くて逆らえない。
その場で土下座をした。
てかデバイスに土下座をするマスターって一体？

「マスター。当たりましたがなんともないようですね。」

「なかなか頑丈ですね。ですが流石にこれは防げないでしょう。ブ
ラストフォーム」

少女の右腕に赤い魔力が集まり、杖が巨大な赤い銃となり腕と一
化していた。
銃口で魔力が集まっていく。

「あれは…収束砲！？」

は？

「私は私の目的のために貴方を倒してロストロギアを集めてそして

「……」

どんどん大きくなつていいく。まるで太陽のよつになつていいく。
さて、どうしようか？あれ避けたら確実に道路とかに被害が出るか
ら止めたいんだけど無理そうだし、やつぱりあれしかないか。

「…………る」

「マ、マスター？」

「覚悟を決めろ！…」

よし、こつなつたら小細工は無駄だ！…だつたら

「行きます！…サンシャインブレイカー！…」

太陽のような収束砲が放たれた。

「マスター！…死ぬ気ですか！…？」

その太陽のような収束砲に向かつて飛んだ。自分が出せる最高のス
ピードで…

第八話「沈黙そして戦闘 あの沈黙の時間は本当にヤバかった。」てか作者は文才

次回予告テイク1

半額弁当を巡りテレビの中で戦つサーヴァント達

雁「待て！－色々待て！－色々なアニメを『ちぢみ』混ぜにすんな！－」

次回予告2

少年と少女は争う。ある一つの物を巡り。少女が戦う理由とは一体？そして乱入してくる人物。最初はデバイスとの一つの出会いだった。それが人の命を賭けた戦いに…

次回「命と責任 命はどんな人間だって一つしかない。命を増やすことなんて出来ない。」
お楽しみに。

雁「ちぢみとしてるだと！－」

次回転生者登場！？危なくなったら他作品のキャラに助けを求める。う。

雁「他作品？」

次回出るキャラの自己紹介

雁人

次回も主人公として頑張ります。

アイ

マスターのデバイスとしてマスターを支援します。

レナ
レナと申します。次回も出でて貰います。よろしくお願ひします。

？？？

名前なんてない。 ただの底辺クラスの代表さ。 クラスは三年Fクラスだ。 よろしく。

毎回やるかも？

第九話「命と責任と転生者 命はどんな人間にだって一つしかない。命を増やす

タイトルと内容はいつも一緒に限らない。

第九話「命と責任と転生者 命はどんな人間にだって一つしかない。命を増やす

「マスター……？」

「ツー？」

俺は太陽のような収束砲に真正面から突っ込んだ。

よし……

「今だああああ……！」

ドオオオーン……！

その瞬間俺の視界が光におおわれた……

「さて……あの行動には驚きましたがこれでロストロギア入手出来ますね。」

「まだ終わってねえよ……！」

「なツー？」

俺は少女との距離を詰め……ハンマーを降り下ろした。

ブオン……！

ドス……！

「くつ……！？」

少女はハンマーの直撃を耐えた。

「何故……無傷なんですか？」

少女がそう聞いてきた。あの少女が言つた通り俺は無傷だ。

「なあ、俺にはもう一つロストロギアがあるんだよ。お前も知つて黒いが渡してくれたな。」「はい……知っています。」

「金貨から狼や魔女が出せた……ヒントはこれぐらいで良いよな？」

「まさか……！？」

「分かつたみたいだな……そうだ俺は収束砲が当たる瞬間に金貨から黒い人を出し盾にした。」

まあ、黒い人はあいつの砲撃を防げていたから収束砲を防げるかな
うつて思つたら流石に無理みたいで俺を収束砲が届かない所に投げ
てもらい黒い人を消して金貨を腕輪にはめてあいつに突撃すれば良
いだけだ。

「貴方はバカですか？」

「何でバカ呼ばわり！？」

「悔しいですが……その通りです……」

「アイさん！？裏切りですか！？」

畜生！－味方のはずのデバイスに裏切られるとは飼い犬に手を噛まれた氣分だよ－－！

「貴方はやはりアイでいいんですか？」

あの子はアイについて俺より詳しそうだな…聞いてみよつ。

「ちょっと聞いて良いか？」

「アイの事ですか？」

「私の事ですか？」

な、何で敵とハモつてんですか。

「私の事は私が言います。」

どうやら真面目な話のようだな。

「伏せろ！－小僧！－！」

「ゴパツ！－！」

いきなり狼がタックルしてきた…何で…

狼にタックルされ落ちていると先程自分がいる場所にゴウツ－－と
黄色の光線が通過した。

「チツ！－外したか…」

上から声が聞こえた。上を向くと金髪の少年が不機嫌な顔をして飛んでいた。

「何ですか！？貴方はー」

いきなり現れた少年を見ようと振り返った瞬間少女がいたところが爆発した。

「まず一人目…」

ぼそっと呟いた。

「ちょっと大丈夫？」

少女は気絶しており落ちていく少女を魔女がキヤッチした。

「無駄に生きんな…とつとと死ねよ転生者。」

今何て言った…俺はあいつの言葉を理解するのにかなり時間をかけた。

「おつと抵抗なんてするなよ。意味ないからな。なんたって俺は才り主だからな。」

は！？なに言つてんだあいつは！？

「お前らモブに構つてる時間はない。死ね。」

やばい… またあの光線を撃つ氣だ。

「マスター……」には逃げましょ……」

アイの意見に賛成だが……

「狼と黒い人出して魔力ほとんど使ったから逃げれない。」

「なつ……？」

「死ねモブーゴフッ……」

いきなり少年が落下した。

何で？

少年がいたところには一人の青年がいた……否落ちた。

「えええええええ……？」

「マスター落ちていきますよ。 あの人。」

そしてすれ違いになりながら少年が飛んできた。

「何しやがる……モブキャラが……」

激怒する少年対して青年は

「人を半殺しにしといてなに言つてんだ？ 厄一患者。」

笑っていた。

「厨」「だと……」

「当たり前だろ？自分の事を転生者とかオリ主なんて言つてりや厨一患者以外の何者でもないだろ？」「

「くはっ……」

「マスター笑つては失礼ですよ。」

俺は笑いをこらえていた。

「モブ……てめえ……久し振りにムカついた……名前は……」

少年が青年に怒鳴りながら聞いた。

「夢想だ。夢想浜也だ。底辺クラスの代表さ。厨一患者。」

名前を名乗りながら人を挑発出来るなんて……ん？」
に来た？

「よつここしょと。」

俺を抱き上げた。へ！？

「さて、俺達はここから消えるわ。」

「はあ？人扱いで俺から逃げられるとでも思つてんのか？」

確かに……

「ああ……そう思つていろから言つたんだよ。あばよ、厨一患者ー。」

「」

浜也さんがそつまつと一瞬で景色が変わつた。

えー?

「は、速すぎるー。」

アイも驚いてるよ。

「これぐらい鉄人から逃げるために必要な物の一つだぜ。」

す、すげえー!

「」のまま安全と思つた場所まで移動するぞ。」

「はー。」

「ついで厨一な転生者との出合いを終えた。

わ、アイに聞きたことが出来たし聞くか。

第十話「次元漂流者とデバイス「アイ」前編 今回はシリアルを回すーー！」

前回のあらすじ／あの後厨一患者から逃げた。
あらすじ終了

「さて、そろそろ良いかな？」

浜也が雁人をおろした。

「ありがとうございました。」

雁人があれを言つと浜也は良い笑顔で

「まあ、それは良いとして雁人だつけ？ちょっと聞いて良いか？」

「へ？何を聞きたいんですか？」

何を聞きたいんだろう？はーー！もしかしてさつきの事？聞かれたらどう説明すればいいんだ！？と雁人は浜也の質問に対しこう考えていた。

「……何処？」

「は？」

雁人は浜也の言葉を上手く聞き取れなかつた。

「もう一度お願ひします。」

「……、何処?」

「…………ですか?」

「…………」

「…………」

どうやら自分の聞き間違えではないらしい。

「海鳴市です。」

俺は正直に答えた。

「 もう一回。」

あれ、これさっきも同じようなやつとつをしたような?

「ジャブ?」

「海鳴市です。」

「…………」

「…………」

い、痛い。何で海鳴市を知らないんだろう?。

「浜也さんでしたか?」

「うおっ！？ アクセサリーが喋った！？」

驚きますよね。アクセサリーが喋つたら。

「浜田さんはどうしてここに来たんですか？」

「さあ、何か宝石みたいなのを拾つたら急に光つて気づいたらお前らがいた。」

も、もしかして……

「次元漂流者ですね。」

「次元漂流者？」

簡単には迷子です。

アイ：何だよ凄い迷子って

一
す
凄
い
迷
子
・

西ノニシミツケノ五てぬじやん!!

帰り方とかなしの

宝石か有れば： いけたかもしれませんね

宝石か

「ん？、それならあるだぞーー！」

簡単に見つかるわーえ！？

「記念になるから取つといた。」

あれ？」「ひこうのを確か…

「（い）都合主ー」

「言わせませんよ。」

ア、アイさん。怖いんですけど…何か黒いオーラが出てるんだけど…浜也さんー！助けて！！

「…………」田をそらした。

野郎ーー！

その時、カツーーと宝石が光った。

「ぐわああああーー！」

「田がーーー田があああああーーー！」

俺と浜也さんは宝石から出た光に田を殺られ、地面にのたうつ回っていた。

宝石の光が無くなると浜也さんはいなかつた。

そして…浜也さんがいたところには宝石だけが残っていた。

「浜也さん？」

「どうやら無事に帰れたみたいですね。」

良かった。

「さて、帰つて話をしようか。アイ。」

「分かりました。」

俺達は家を目指した。

え？ 宝石はどうしたかって？ 俺が回収しました。売ればかなりお金
が入るよ。

「マスター。宝石は売つてはいけませんよ。」

アイに釘を刺された。

畜生…

帰宅

「死ねや……糞が……！」

「まだまだ甘いわ！！バカ息子が……！」

親父と拳で語り合つた。

何でか？フツ、親父がすき焼きには牛肉って言つたからだ。すき焼きには豚肉に決まつてゐるでしょ？！

勿論負けました。親父の踵落としが決まり俺はまた敗北した…そのあと親父にサンドバッグにされた。

「かりちゃん。大丈夫？」

母親に心配された…心配するべういならやり過ぎないよう親父に言つてくれ…頼むから…

自室

「痛い。」

「自業自得だと思いますよ。良いじゃないですか牛肉でも。」

「駄目だ…豚じゃないと…まあ、そんなことは決つでもいい。」

「どうでも良くないけど今は我慢だ。」

「アイ…聞かせてくれ。お前はどうこうデバイス何だ？」

豚とか牛とか今はどうでもいい。今はアイだ。

「分かりました。私は「アイ・グラムド」です。」

「アイ・グラムド？」

「私は…元はマスターと同じ人間です。」

俺はアイの言葉に驚きが隠せなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467z/>

魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。

2012年1月14日17時55分発行